

## 資料紹介

## 続 経済学者の追悼文集（三）

杉 原 四 郎

## は し が き

本稿は前稿（本誌第44巻第1号）のあとをうけて、最近入手した経済学者の追悼文集を紹介するものである。単行本1点、雑誌の追悼号13点合計14点で、10名の人々の追悼文集をとりあげる。

最近わが国の経済学界の長老石橋湛山、大熊信行、高橋誠一郎らの生誕110年、100年、歿後13回忌、歿後20年などにあたって、故人のゆかりの雑誌で追悼号が発行された。本稿はこれらの諸雑誌の紹介を中心としている。

## I

## (1) 石橋湛山 (1884—1973)

『週刊東洋経済』、東洋経済新報社、1993年4月24日号、歿後20年石橋湛山特集（54—66ページ）。

座談会「いま石橋湛山ならどうする」、出席者長幸男、増田弘、宮崎勇。はじめに本社から「ジャーナリスト、[エコノミスト]政治家として湛山が一貫して主張してきた自由主義・民主主義・平和主義の現代的意義を語っていただきたい」ということばがあり、三人がそれぞれの湛山との出会いを語って本論に入る。まず、ポスト冷戦時代を石橋がどう見るかについて、増田は日本の政治家で脱冷戦思想を最初にとりあげたのは石橋だといい、彼が1959年の米ソ首脳会談を高く評価して61年に日中米ソ平和同盟構想をうち出したとして、小日本主義の現代的意義は大きいとのべる。長は石橋が国連を重視していたことを指摘し、彼は米ソの重しがとれた現在、日本は理想的な国連の実現に貢献すべきだと主張するだろうという。つぎに政治改革問題について、長は石橋の理想はイギリスのような活潑な政策論争を展開できる二大政党論だといい、増田もそれに同意する。第三に経済問題だが、宮崎は、現在石橋がおれば、国境なき経済を理想とする彼は開放体制の促進を主張するだろうし、景気対策としては当面赤字国債止むなしと説き、長期的には日本経済の規制

緩和を強調するだろうという。また長は、石橋はガット体制下の日本農業の抜本的改革を提案するだろうとのべている。座談会のあとに、石橋の生涯を回顧した「現代史に刻んだ不朽の功績」(山口正)が彼の年譜や石橋関係書のリストとともにそえられている。1895年創刊の『東洋經濟新報』は1991年6月8日号で通巻5000号に到達したので、これまで刊行された雑誌のうち9冊を復刻し、それにそえて小冊子『週刊東洋經濟5000号の歩み』を発行した(16ページ, 1991年6月1日, 非売品)が、これも貴重な石橋関係書の一つである。なお石橋の20周年を記念して、増田弘『侮らず、干渉せず、平伏さず——石橋湛山の対中・外交論——』(草思社, 1993年)と『湛山座談』(同時代ライブラリー, 岩波書店, 1994年, 解説林健久)が出版された。

『フォーラム 立正大学報』23, 1993, Autumn, 石橋湛山生誕110年記念シンポジウム, 「石橋湛山の行動と思想を現代に問う」(2-50ページ)。

石橋が学長をしていた(1952-1968年)立正大学で6月18日にひらかれたシンポジウムは、基調講演宮崎勇, パネリスト宮崎勇, 松尾尊允, 松山幸雄, 長幸男, 増田弘, 福岡克也, 進行山口正の顔ぶれで行われた。渡辺立正大学学長の挨拶, 長幸男の主旨説明のあと, 宮崎の講演があり, 石橋の經濟思想の特徴, また現下の經濟問題を石橋ならどうみるだろうかについてのべられ, 最後に經濟政策を考えるに際して一番大事なことは人間性を大事にすることにあるが, 人間の自由と尊厳こそがまさに石橋の哲学であると結ばれている。

パネルディスカッションは, 近代政治史と經濟思想史の視点から(松尾・長), 外交史の視点から(増田), ジャーナリストとしての石橋(松山), 社会思想家としての湛山(福岡), 石橋哲学の根底にあるもの(増田), これからの日本と石橋思想(松尾・松山), 國際經濟のあるべき姿(宮崎・長), 國際平和のために(全員)の順序で進行, 神尾昭夫の閉会の辞で終った。このシンポジウムについては『自由思想』68(1993年)をも参照。

諸家の各専門の立場からみた石橋論, いま石橋をかえりみる意義についてのそれぞれの見方は有益であったが, 私には福岡が1959年『立正大学經濟学季報』にのせた石橋論文「明日の經濟学」を紹介し, そこに石橋の主張する資本主義と社会主義・共產主義を統一する「第三の生活原理」が見出しうるとのべ, 最後に「一天四海皆妙法に帰す」という言葉が提示されているとのべているのが印象にのこった。なおこの号にはもう一つ, 石村柳三「若き石橋湛山と詩人——湛山は詩人をどう捉えていたか——」がのっている。

ちなみに現在東洋經濟新報が創刊号以来復刻されつつあり(『龍溪書舎』), その配本附録に東洋經濟新報や石橋湛山についての文章がのっている。第5回配本の附録(1993年11月)には, 正田健一郎「近代日本においてただ一つの『転向』なき雑誌」, 小泉仰「J. S.

ミルと『宗教三論』；杉原四郎『『東洋経済新報』の二特質』がのっている。

## (2) 大内兵衛 (1888—1980)

大内は喜寿のときにゆかりの人々が彼の人物について書いた『山麓集』が出たり、『著作集』も刊行されたり(附録の『月報』には毎号彼のことを書いた諸家の文章がのっている)したので、歿後単行本のかたちでの追悼文集はでていないようだが、関係の深かった雑誌に追悼文集が1980年7月同時に二つつぎのように掲載された。

『世界』、岩波書店、第416号、1980年7月1日、「追悼大内兵衛先生」296—329ページ。巻頭に遺影と筆蹟の写真11葉、本文中にも写真多数。

辻清明、中村哲、丸山眞男による「大内兵衛先生——人と学問」という座談会につき3名の文章がつづく。「大内先生逝く」有沢広巳；「学者・教師としての大内先生」武田隆夫；「壺中の詩」古在由重。

座談会は、はじめに編集部から大内が『世界』の「創刊以来雑誌の骨格を形成する上で大きな支えになって」来たことをのべる。丸山は大内が労農派というレッテルを貼られることを非常に嫌がっていたことをとりあげ、中村もそれに同調して大内は「行動の問題と研究者としての限界の問題、その意味から労農派じゃないといって」いたと思うとのべる一方、「ただ大内先生はしまいのほうになると老いの一徹といっちは悪いが、マルクス、レーニンばかりになるでしょう。あれを見ると労農派や協会派 そのものではないけれども、つまり社会主義のファンですね」とのべる。以下大内における理論と実践の問題が、彼の財政学の特質について、政治学と経済学との関係について、大正デモクラシーと大内の思想について、あるいは大内の思想をつちかった故郷の淡路島について、大内と儒教的教養と経世済民の学についてなどに関して論じられる。大内と河上肇との関係もその一つだが、たとえばこれについて丸山はいう、「社会科学者の中では大内先生が漢詩をつくれる、おそらく最後の世代でしょう。もっと前の河上先生は漢詩を多く残したし、墨絵まで書きましたけれどね。……大内先生は大正デモクラシーの洗礼をうけているからもう少しウェスタナイズされている。だけど色紙でも『國破山河在』のようなものだけかと思ったら、御自分の漢詩がありますね。非常に立派な字で書いてある」。

有沢は大内が東大で「経済学の勉強ではドイツ人講師ヴェンチッヒから、また思想的人格的には高野岩三郎先生から大きな影響かうけ」たこと、大内は「私はいい日和見主義者になりたい。いな主義者というのは少しおかしい。よく日和を見たい」というが、「私としてはこの言葉の裏に先生のデモクラートとして一歩も退かないという気魄を感じる」と

書いている。東大の財政学講座をついだ武田隆夫は、大内財政学の独自性をささえていたのは、従来の財政学の「支配階級の意図の弁解のことばたることから吾々の科学を解放する[という] ささやかな念願であった」(『財政学大綱』中巻の序)という。古在由重は父由直(大内が東大に復職した時の学長)と自分(唯物論的哲学者)との二代にわたる大内との関係について語っている。

『社会主義』大内兵衛・向坂逸郎編集、社会主義協会、第172号、1980年7月1日、「追悼大内兵衛代表」12—51ページ。巻頭に遺影と筆蹟の写真4葉。

「大内兵衛先生を憶う」向坂逸郎；「大学者・大君子大内兵衛先生」土屋喬雄；「大内教授を悼む」H. ゲムコウ(東独M. L 主義研究所所長代理)；「マルクス 経済学と大内兵衛先生」鈴木鴻一郎；「マルクス財政学と大内先生」大間知啓輔；「われらが民主主義の道標・大内兵衛」櫛田克巳(櫛田民蔵の令息)；「大内兵衛先生年譜」編集部。

向坂は、「大内先生は政治集団には正式にはいっておられたわけではない。ただ大森義太郎、向坂逸郎の二人の『労農』派同人がその志を同じくする人々とともに「阿部事務所」なるものを神田につくり、そのメンバーとして大内兵衛先生……等が集まった。……それが当局の好みに合わず1937年12月いわゆる『労農』派が一斉検挙されるとともに「阿部事務所」関係の人々が、翌1938年2月「人民戦線事件」の教授グループとして検挙された。……これから後約10年間に先生はマルクス主義的社会主義者として成長され、さらにそれ以降40年余思想的理論的にいろいろの教育活動を通じて、マルクシズムを実践された。……大内先生はこの時期以降マルクシストといつてよい」とのべている。土屋喬雄は大内・土屋共編『明治前期財政経済史料集成』を刊行した時の思い出を語り、鈴木鴻一郎は大内が宇野理論をどう考えていたかという問題を追求して、その資料として鈴木あて大内書簡を公開している。大間知啓輔は大内の理論的業績として、事実上労農派理論を提供したこととマルクス財政学を成立させたことをあげ、また大間知と櫛田克巳とは大内の戦後におけるオピニオンリーダーとしての活発な活動についてのべている。

この二誌の追悼文集は、大内兵衛の人と思想のみならず、日本のマルクス経済学一般を考えるうえにも有益な示唆にとんでいられる。

なお大内の財政学については佐藤進「民主主義財政思想の鼓吹——大内兵衛——」(佐藤進編『日本の財政学——その先駆者の群像——』、ぎょうせい、1986年所収)を参照。

### (3) 大熊信行(1893—1977)

『大熊信行研究』第10号、1993年12月28日。大熊信行研究会(東京・論創社内)、特集

大熊信行先生誕生百年記念講演会(2-25ページ)。

1993年6月19日に東京の日本出版クラブ会館で開かれた(参会者70名)記念講演会の記録がおさめられている。主催者代表挨拶板垣与一、「大熊経済学の印象」篠原三代平、「国家の二重性と家の二重性」鶴見俊輔。なお講演会後の記念会パーティーで山形県郷土学習ビデオ教材『大熊信行(経済学者・評論家・歌人)』が紹介された。篠原の講演は、大熊先生の講義(篠原は高岡高商で大熊の経済原論を聴いた)、均衡理論と配分原理(東京商大で篠原は中山伊知郎のゼミに入った)、動学的配分論、国際的資源配分、生命再生産の理論、生産単位としてのファミリー、大熊経済学の長所と問題点の順序で進められた。最後のところで篠原は、大熊経済学には歴史的な視点が十分でなかったことを問題点としてあげている。

鶴見俊輔は、大熊がなぜ「告白」を書いて戦後自分の学問をやり直せたかを問い、「もともと大熊信行氏は既成の学問である経済学よりもっと広く人間の思想の可能性の中から経済学を考える方法をもっていた人だからです」という。そして鶴見は戦後転向の問題や戦争責任の問題を通じて大熊と会うのだが、「そこでも大熊さんの出してきた家庭論というものはおもしろいと思いました。家庭というものは転向意識を浮上させないからといって弾劾されるだけのものではない。片一方を切り捨てて片一方をとる……というような問題ではない。それぞれを見てゆくという方法があり得る。その手がかりは大熊信行の著作全体の中に含まれていたように私には考えられるのです。それは、二重の性格をもった国家と二重の性格をもった家とが相合う場所です」とのべている。

『あづまね』、九里学園教育研究所(米沢市門東町1-1-72)、第11号、1993年10月20日、特集大熊信行先生・生誕百年記念、63-92ページ。

1993年6月25日米沢市で「大熊信行先生・生誕百年を記念する会」主催の講演会で大熊先生の人と業績を語る会の出席者(200名)に配布された資料の一部と記念講演の記録とを収録したものである。故人の遺影・筆蹟などの写真9葉が挿入されている。内容はつぎの通り。

大井魁「大熊信行 思想と業績」、これは『米沢市史編集資料』第02号(1983年)にのった「大熊信行」を改訂したものである。大井は大熊の「経済学から出発した人間生命再生産という思考法は、既成の経済学の枠を越えて家族論・新家政学を生み、人間形成論・教育論に及び、大熊の生涯の思想活動を貫く基調音になった」といい、また「自分自身の戦争責任問題を戦後論壇活動の起点とした大熊は、核時代において家族は『生』を象徴し、国家は『死』を象徴すると論じ、『国家悪』を人間内面の問題として摘出した。……人間

理性の立場から国家を否定する大熊には、他方現代日本の忠誠喪失『半国家』状況と祖国喪失状況を憂える心情があり、その両者の苦渋に満ちた相克が大熊の思想活動の原動力となった」と書いている。

略年譜では「昭和17年、海軍大臣官房嘱託。大日本言論報国会理事。同18年、軍の圧力で執筆活動中断」の項が目される。主要著作リストの最後は『国家悪——人類に未来はあるか——(新装決定版)』、1981年、論創社である。

生誕百年の記念出版として刊行された『ある経済学者の死生観』(論創社)を大井魁が、歌集『大熊信行の歌』(米沢豆本の会)を遠藤綺一郎が紹介している。また大熊の長歌「はゝの手」を遠藤が「信行の歌の全作品中でも代表の随一」として解説している。

鶴見俊輔は記念講演「大熊信行にとっての文学」で、大熊が1926年頃につくった「街頭にあらはれた鮮人の労働をまぼろしほどに市民はおもふか」、「東京駅前に深夜きて見ろくらがりに鮮人むらがり石掘りかえす」という歌を1922年生れの鶴見がよんで強い感銘をうけたことをのべている。また「大熊さんは郷土愛と世界愛が結びついた不思議な人……世界愛と郷土愛のせめぎ合う二つのものの組合せ、それが大熊さんという人の独創性の底にあった。大熊さんの経済学・国家学の底にある大熊さん流の文学というものを把えることなしには大熊信行の独創を理解できないと思います」とのべて講演をむすんでいる。

鶴見が米沢での講演の中でふれているように、1993年に大熊の思想を再評価する労作が岩波から二種刊行されたが、さらに1994年になって『思想』3月号につきのような論文がのった。生誕百年を機に大熊への関心が高まってきたのであろうか。松本三之介「大熊信行における国家の問題——『国家科学』から『国家悪』まで——」。

## II

### (4) 神戸正雄(1877—1959)

『経済論叢』(京都大学経済学会、第84巻第6号、1959年12月、記事「神戸先生御逝去」、91—112ページ)。

本誌の冒頭に故人の遺影と筆蹟の写真3葉を掲げる。記事の欄は、はじめに京大名誉教授、帝国学士院会員法学博士神戸正雄が1959年10月16日急逝したことをのべ、故人の略歴を記した後、10月18日京大法経第七教室でひらかれた無宗教形式の告別式をのべている。また故人の詳細な経歴と著作目録は本誌の第80巻第4号および第44巻第5号にゆづるむねを書いている。つぎに告別式での弔辞4通(京大経済学部長、日本学士院長、関西大学学長、京都市長)を紹介し(故人は京大退官以後関西大学の学長となり、また理事・顧問と

して私学の発展に努力し、また1947年公選によって京都市長に当選、4年の任期をつとめた)、つぎの11名の追憶文をかかっている。新村出、井藤半弥、本庄栄治郎、小島昌太郎、石川興二、蛭川虎三、大谷政敬、小山田小七、堀江保蔵、島恭彦、松井清。

新村は一高東大を故人と共にすごし、東大で中隅敬蔵の経済学を共に聴いたことをのべ、井藤は故人の代表作『租税研究』に最も力強く導かれたことを語り、大谷と小山田は財政学専攻の門弟としての思い出をのべる。他の7名は京大経済学部の教官として故人の後輩の立場から故人の学識・人格について語っている。とくに故人が京都大学とその経済学部非常に強い愛着をもっていたことが多くの人々によって強調されている。たとえば本庄は「東京大学からしばしば轉任の交渉があったようであるが、先生は京都大学を去らぬという固い信念を持っておられた。その後経済学部が独立したが、京大経済学部こそは先生の子であった」という。又故人の思想がリベラルであったことについて、石川は「先生の御性格は、進歩的であったが、寛容であった、故に先生の門下よりは、左翼的な人のみでなく多方面の人材が出たものである」と書き、松井清は、「わたくしのみるところでは、神戸先生は経済的自由主義者であり、学問上においてだけでなく生活実践の上でも合理主義者であった」と書いている。

本誌にはこの他に佐波直平の「神戸正雄先生による再保険特約方式の輸入」という論文があり、故人は「再保険特約の方式を日本に輸入せられ特筆すべき功績をのこされた日本損害保険業にとっての一大恩人である」ことがあきらかにされている。

本誌は、神戸正雄の自伝的エッセー集『対楓庵雑記』(朝日新聞社、1948年)や金沢史男「正統派財政学体系の確立——神戸正雄——」(前掲佐藤編『日本の財政学』所収)ともよまれるべきであろう。

私はこれまで田島錦治、戸田海市、河上肇、河田嗣郎の追悼文集をとりあげてきたが、この神戸の追悼文集を加えて、京大経済学部の長老教授だった5人の追悼文集を紹介することができた。

#### (5) 小林良正 (1898—1975)

『専修大学社会科学研究所月報』第151号、1976年4月20日、「小林良正先生への永別の辞」。

1976年1月19日に、4日谷会堂での葬儀で読まれた専修大学長相馬勝夫の「永別の辞」が巻頭にある。「ご尊父丑三郎先生と良正先生の二代に亘る本学との密接なご縁」が語られる。友人代表平野義太郎の「50年の学友であり心の友である故小林良正君を偲ぶ」も、

教え子の代表望月清司の「お別れのことは」も、1月19日の葬儀のときの弔辞である。平野は講座派を代表する論客の一人としての小林の学問的事績をふりかえり、最後に小林の作「凜烈の冬を凌ぎていち早く夜目にも著るき山茶花のはな」を紹介する。望月は「そのお立場に螻蛄の斧をふりあげた貧しい著書、それを先生に献げることを心から喜んで許して下さったばかりでなく、これには根本的な反批判をくわえなくてはならないとおっしゃって、そのための新しい研究を開始されたのでした」とのべている。宇佐美誠次郎は「日本とドイツ民主共和国との友好のために尽された功績について」のべ、森下澄男は「小林先生の思い出」の中で、「専修大学と小林父子」と「戦後の学園復帰」で小林丑三郎・良正——森下は学生としてこの二人の講義をきいた——と専修大学との関係をくわしくのべている。最後に泉武夫のまとめた「小林良正先生略年譜・著作目録」がのっている。

本誌は、故人の自伝風の著書『日本資本主義論争の回顧』(1975年、私家版、1976年白石書店)や「小林先生を囲んで、きき手加藤幸三郎・森川喜美雄・殿村晋一」(『専修大学社会科学研究所月報』第100号、1972年1月)などと合わせて読まれるべきであろう。

私はこれまでつぎのような講座派の論客の追悼文集11点を紹介してきた。相川春喜、伊東三郎、井上晴丸、小椋広勝、川崎己三郎、野呂榮太郎、羽仁五郎、平田良衛、平野義太郎、深谷進、山田盛太郎。それらに小林良正のこの追悼文集を加えると12人のそれをよむことができるようになった。

#### (6) 渋沢栄一(1840—1931)

渋沢栄一が1931年1月11日に歿した直後、12月12日に東京市、協調会、中央社会事業協会、国際聯盟協会の共同主催で故渋沢子爵追悼講演会がひらかれ、それが協調会編刊『故渋沢栄一翁追悼講演録』(1932)年にまとめられた。また故人が関係した数種の雑誌が追悼特集号を刊行した(例えば、『龍門雑誌』青淵先生追悼号、1831年、『二松』第7号や『如水会会報』など)が、その中の一つを紹介する。

『国際知識』、国際聯盟協会——故人は本会の創立以来一貫して会長をつとめた——発行、第12巻第2号、1932年2月、「故子爵渋沢栄一翁追悼号」、(1—60ページ)、定価40銭。巻頭に11月14日の「御沙汰書」と遺影の写真あり。

寄稿者は次の16名。本協会総裁徳川家達、本協会名誉会長石井菊次郎、本協会副会長阪谷芳郎、本協会副会長山川端夫、新渡戸稲造、穂積重遠、下村海南、坂本俊篤、林毅陸、宮岡恒次郎、吉岡彌生、田川大吉郎、松田道一、姉崎正次、小畑久五郎、白石喜太郎。



徳川は、故人が国際親善のために特に努めたことは、(1)日米親善、(2)国際聯盟の援助(3)日本と中国の融和の三つだといひ、石井は移民問題のために有志実業家を組織して、渋沢渡米団を実現し、これへの応酬としてアメリカから実業家の渡日団がきたことをのべている。阪谷芳郎は『ニューヨークタイムズ』によせたヒューストンの追悼文で故人がワシントン、リンカーン、グラッドストーン、ガリバルジに比されていることを紹介している。新渡戸は故人が歿する2ヶ月まえに上海でひらかれる太平洋問題調査会に出席するため挨拶に行った時、故人が病気を患って新渡戸に、福州問題や移民問題や中国の排日感情の問題などについて善処方を懇請したことをのべている。

なお本誌120ページに12月12日の講演会で主催4団体を代表して朗読された「追悼の辞」(斎藤守圀)の全文がのっている。

渋沢研究の雑誌は『青淵』(『龍門雑誌』の後継誌)が渋沢青淵記念財団龍門社から発行されているが、これとは別に最近『渋沢研究』が創刊された(1990年)。渋沢への関心が今も失われていないあらわれであろう。

(7) 高垣寅次郎(1890—1985)

『高垣寅次郎教授追悼論文集』、『経済研究』(成城大学経済学会)の追悼号(1987年1月17日発行)を単行本のかたちで発行したもの。A5版430ページ、非売品、巻頭に故人の遺影一葉。

本書は追悼論文集が主体で、研究論文掘家文吉郎「銀行の手数料」など15篇を収録しているが、他につぎのものをも含んでいて、その限りでは追悼文集でもある。追悼の辞、岡田清(成城大学経済学部長); 弔辞、有沢広巳(日本学士院長); 「高垣先生とケインズ卿」松坂兵三郎、巻末が高垣寅次郎先生略歴及び業績。

岡田、有沢、松坂(その第四節)の三つは、1985年9月28日の成城学園葬での弔辞である。故人の金融論研究の跡と、成城学園との関係と、わが国のケインズ研究と故人との関係と、学士院会員としての故人の活動などが語られている。なお『日本学士院紀要』第41巻第3号に会員高橋泰蔵「故高垣寅次郎会員追悼の辞」がのっている。また高垣のケインズ研究については、早坂忠編『ケインズとの出遭い』(日本経済評論社、1993年)所収の「高垣寅次郎『東洋経済』に結集した学界・実業界の管理通貨制度研究」を参照。

『経済研究所年報』第4号、高垣寅次郎博士生誕百周年記念号、成城大学、1991年4月20日発行。

研究所長中村英雄の「高垣寅次郎博士生誕100周年にあたって」によれば、研究所は、

高垣が強い関心を抱いていた中央銀行の制度・政策・歴史についての研究報告会を開催したが、ここに1990年に行われた四つの研究報告をおさめ、同年6月30日にひらいた「高垣先生を偲ぶ」座談会の記録が収録された。

座談会には故人の令息堀家文吉郎(早大)、矢島保男(同)、田村茂(慶応)、麻島昭一(専修)、中西充子(城西)、村本孜(成城)の各大学教授をはじめ11人が出席、峰本暉子が司会し、「高垣先生の学問上の業績について」、「高垣先生の蔵書について」、「晩年の教育者としての側面について」、「高垣先生の学外での仕事について」の順序で諸家が発言している。なお村本孜は『自由思想』43(1987年)に「高垣寅次郎」を書いている。

「学問上の業績について」のところで麻島昭一が「高垣先生が大隅文書を世の中に押し出された功績は大変大きい」とのべていること、「高垣文庫」について中村英雄が高垣は目標をきめて本を集めた、一つはジョン・ローのインフレーションに関するもの、もう一つは地金論争に関するものだといっていること、「学外での仕事について」では英国金融史研究会でクラップムとホートレーの著書の研究と翻訳が高垣を中心に進められたことが語られていることなどが印象にのこった。

なお『如水会会報』No. 328(1957年8月号)に「座談会、旧師を語る(その二)、高垣寅次郎博士」が掲載されている。

### III

#### (8) 高橋誠一郎(1884—1982)

高橋誠一郎の追悼文集は、歿後まもなく『三田評論』第826号(1982年6月)が全号(186ページ)をあげて特集した(杉原「雑誌特輯号に見る経済学者の追悼文集」、杉原『日本の経済雑誌』日本経済評論社、1987年所収を参照)。その『三田評論』が、1993年と1994年に高橋についての座談会と追悼講演をのせたので紹介しておく。前者の座談会は高橋誠一郎『経済学史著作集』(全4巻、創文社)の刊行を機に開かれたもの、後者の講演会は1993年11月18日に丸善で行われた著作集刊行記念講演会での二人の講演(この二人の他に服部礼次郎と津田内匠の講演があった。二人は高橋のことを『学燈』1994年4月号に書いているが、多分この時の講演の話であろう)を収録したものである。講演会と同時に丸善ギャラリーでは「高橋誠一郎旧蔵古版西洋経済書展——『ユートピア』から『国富論』まで——」が開催され、1481—1800年まで刊行された書籍約130点が展示、その写真カタログ(B5版154ページ)も出た。それは故人の遺影を巻頭におき、展示古版本カタログの他につきの文章をおさめる。「高橋先生と慶応義塾図書館」、内池慶四郎；「原典主義を貫く」、

飯田裕康；「高橋先生の蔵書・研究・講義」野地洋行；「高橋誠一郎先生旧蔵古版本について」、飯田裕康・塘茂樹；「高橋先生の経済学者としての足跡」、小池基之（『三田評論』1982年6月号にのった「経済学者としての足跡」を転載したもの）。

『三田評論』1993年11月号（第952号）にのった座談会「高橋誠一郎、人と学問」は、飯田裕康が司会し、長老の小池基之と、著作集の編集にたずさわった神代光朗・坂本達哉と、慶応の図書館所蔵の高橋文庫の整理にあたった塘茂樹の5人が出席し、「高橋経済学の柱」、「原典主義を貫く」、「次世代にとっての著作集」について語り合ったものである。坂本が高橋の『重商主義学説研究』には「学説史、経済史、書誌学という三つに加えて、広い意味での思想史というものが、大変重要な伏線として全体を貫いている」といい、神代が「先生が社会思想史的な関心をずっと経済学史研究に持ち続けられたということにとっても興味があります……『古版西洋経済書解題』を読んでも……非常に気骨のある方だというのが伝わってきました」と語っているのが印象的であった。私も『著作集』の推薦の言葉（これは小林昇、杉山忠平、杉原四郎、津田内匠の4人によって書かれた）の中で高橋経済学史のもつ社会思想的側面の重要性にふれた。

『三田評論』1994年2月号にのった気賀健三の「人間・高橋誠一郎」という講演は、高橋と小泉信三とを比較している。二人の講義の仕方は対照的で、小泉は論理的・合理的であるのに対し、高橋の方は「何か面はずかしい雑談みたいなものが入って、いつの間にか興味を引きつける」という仕方。また若い研究者に対する指導法は、小泉の方は「身内のひいきをする、好きな方には身を入れて世話をなさるけれども、自分の意に添わない方には極めて冷淡であった…が、高橋先生は意に満つとか満たないとかいうことにはあまり関心をもたない」、公明正大というのか淡泊なところがあったとのべている。

福岡正夫は講演「高橋誠一郎先生と経済学史」の中で、高橋は通説のいうように重商主義は自由主義の敵ではなく、かえって自由主義経済学の先駆者のだというのが、これはシュンペーターの『経済分析の歴史』でのべていることと全く同じものであること、また通説では価値論は費用価値説から効用価値説へと展開したといわれるが、高橋は効用価値説は費用価値説に先行し、大陸の初期の効用価値説論者は費用価値説を同時に展開してきたと指摘して、この点は現代経済学に対しても重要な示唆をあたえるとのべている。

#### (9) 前川嘉一（1922—1990）

『前川嘉一先生を偲ぶ』、編集発行京大経済学部前川ゼミナール同窓会「京遊会」、連絡先京都市伏見区深草車坂町17—10田中隆一（編集担当）、発行日1993年12月1日、非売品、

B5版161ページ。巻頭や本文中に遺影、遺稿の写真多数。

「ごあいさつ」(ゼミ第一期生戸村孝昭)によれば、恩師逝いて3年が立ち、今年追悼会を開いたのを機に「先生の論文、新聞等への寄稿の一部および全員諸氏の近況思い出をとりまとめ、前川嘉一先生を偲ぶ『京遊』第2号として発刊することに」した。

最初に年譜・訃報・最後の歌・遺族の思い出があり、次に故人の絶筆となった「労働運動の転進」の原稿、それが掲載された『社会労働評論』(1989年10月号)の写真と青木比呂比の解説があり、つづいて故人の遺稿12編(1962—1989)が掲載されている。労働問題に関する論説が多いが、オーストラリアに関するもの二篇、留学生問題についての文章があり、晩年の故人の関心がうかがわれる。つぎに本書の中心をなす「前川嘉一先生を偲ぶ」が、前川ゼミOBの36名の文章をおさめるが、最初に中国の邵継堯、艾力平、ダララット(タイ国留学生)、青木比呂志の文章がおさめられている。巻末には京遊会全員名簿と会員近況報告があるが、今学界で活躍しているOBは、水野広祐(アジア経済研究所・地域研究部)、川口章(追手門学院大学経済学部)などである。つぎに前川ゼミ(学部)の「演習テーマ・概要、1956—1984年度」がある。毎年の使用教材も示されていて、故人の研究関心の推移がうかがわれる。

故人は1947年京大経済学部を卒業、大学院に進み、岸本英太郎のもとで社会政策・労働問題を専攻、1965年『イギリス労働組合主義の発展』(ミネルヴァ書房、1967年改訂版)を刊行、それで学位をとり1969年教授に昇進した。1985年定年退官。啓文社(京都)からつぎの二著が出ている。*The Labour Administration and Trade Unionism in Japan*, 1984; 『不安の中の社会変動』(1987)。

ゼミナールを母胎とした追悼文集としてすでに紹介したものには、中山伊知郎の背広ゼミが出した『一路八十年』(1981年)や松井清のゼミ出身者の清濁会が出した『松井研究室の思い出』(1981年)がある(杉原『思想家の書誌』, 83—85, 87—88ページ参照)。この『前川嘉一先生を偲ぶ』の特徴は、約30年にわたるゼミナールの毎年のテーマと使用教材(教科書・参考書・指定教材)の一覧表を、経済学部が毎年発行する「授業計画及び講義概要」から抜粋作成したものを収録していることであろう。

#### (10) 宮本常一(1907—1981)

前稿で『宮本常一——同時代の証言——』を紹介したが、それを補うものとして雑誌の特集号を紹介しておく。

『未来』, 1981年8月号, 9月号(未来社), 「特集宮本常一先生—追悼」, 8月号2—46

ページ；9月号9—18ページ。

まえがきに「宮本常一先生が逝去されてから早くも半年が過ぎてしまいました。遅ればせながら追悼特集号をお届け致します。たんに思い出を語っていただくというより『宮本常一の学問的継承』の問題として、同学の方々に語っていただき、小さいながら、学問論特集にすることができました」とある。執筆者はつぎの13人で、『同時代の証言』に書いている人もあるが、内容は別の文章である。

『宮本学』をささえるもの」加藤秀俊；「日本民俗学における『旅』」竹田旦；「現代の聖——宮本先生から学ぶこと——」米山俊直；「真実の民衆の記録を」須藤功；「宮本民俗学の魅力」小谷方明；「海の民・東西の文化」網野善彦；「宮本常一の島嶼研究に学ぶ」大島襄二；「宮本常一先生と私」中野卓；「宮本常一さんとの交流に関連しての回想」船山信一；「宮本常一の技術史——何を学ぶか——」広山堯道；「ハレの日と遊日——宮本先生のヒントから——」宮田登；「焼畑の二股大根のことなど——宮本先生から与えられた宿題——」佐々木方明；「民具研究と宮本常一」木下忠。

網野善彦は宮本の『海に生きる人々』（1994年）からうけついでテーマの一つとして海民史の研究をあげており、大島襄二は、「旅びと」としての島の研究者柳田国男に対し「島の人」としての宮本の島嶼研究についてのべている。また船山信一は、1937—1944年大日本水産会につとめて、漁村・漁業のことを勉強していた頃宮本と知り合い、彼と共に「漁村研究会をしばしば持った」ことや、自分が編集していた『水産界』について宮本から「多くの助言を得た」ことなどをのべている。

私は「経済学者の追悼文集」の中に『柳田国男回想』（1972年）をとりあげたが、今回宮本常一の追悼録をもとりあげたのは、彼等の民俗学に関する業績が、日本の経済学をふくむ社会科学の全般に大きな影響をあたえていると思うからである。

なお現在宮本の業績が学界で見なおされていることは、谷川健一・網野善彦・大林太良・宮田登・南浩一らによるシンポジウム『日本像を問い直す』（小学館、1993年）にもよくあらわれている。

## む す び

本稿は雑誌の特集号のかたちによる追悼文集をかなりとりあげた。大学教員の場合は、現職でなくなった場合、所属の大学・学部・研究所の機関誌か、あるいは同窓会誌やゼミナール雑誌に追悼号が出ることが多い。定年退職後に歿した場合にもそうしたケースが見られる。所属する学会の機関誌が、オピチュアリを掲載する場合もある（たとえば本稿で

紹介したように、『日本学士院紀要』にのった高垣寅次郎のオビチュアリ）。

大学の機関誌の追悼号をしらべるには、国会図書館の出している『雑誌記事索引』人文・社会編が1972年以後年末刊行の巻末に「記念号一覧」をのせるようになったので、一つの手がかりができた。25巻12号（1972年12月）の巻末の「記念号一覧」から経済学者の追悼号をひろし出すと、(1)大北文次郎教授追悼号（『大阪経大論集』84, 1971年11月）、(2)故小原敬士教授追悼号（『経済系』93, 1972年9月）、(3)故麓健一博士追悼号（『商学論纂』13巻6号, 1972年3月）の三点がある。こうした学部雑誌の場合は故人の年譜や著作目録がのるのが通例だが、追悼文は学部長といった役職者の儀礼的な文章がのるのがせいぜいで、友人・門下生などの個人的な回想の文章がのることはむしろまれである。前稿や本稿でとりあげたように、大原社会問題研究所や専修大学の社会科学研究所のような民間の研究所の所報の場合は、本格的な追悼文集として特集されることが多いようである。

本稿で大内兵衛の追悼文集が岩波書店の『世界』で、また宮本常一の追悼文集が、彼の著書を多く出版している未来社のPR誌に特集されていることを紹介したように、故人の関係の深かった出版社の雑誌に追悼文集が掲載されることもすくなくない。私がこれまで紹介した例をあげると、玉野井芳郎（『新評論』, 新評論, 1985年）、佐藤金三郎（『新評論』, 新評論, 1989年）、内田義彦（『機』, 藤原書店, 1990年）などがある。